

今年度第2回目となる外国語活動・外国語科の研究授業を行いました。協議会では、絵本を活用した低学年の外国語活動の指導方法について協議を行いました。指導・講評では、京都光華女子大学教授 田縁 真弓先生よりご指導いただき、研究を深めました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成

～ 思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者：2年2組 担任

単元名：「Shrimp cream rice」

指導講評：京都光華女子大学教授 田縁 真弓先生より



〈研究経過報告〉

研究の視点について

視点1 個別最適な学び、協働的な学びの一体的充実

個別最適な学びとは、児童が自己の目的を達成するために必要感をもって情報を得たり、活動の仕方を選択して取り組んだりすることだと考える。物語に入れるセリフを考える活動において、児童が既習事項の中から場面に適した表現を選択し、コミュニケーションの場で活用することで、個別最適な学びへとつなげる。そこで、グループ学習の一環として、児童が物語に適したセリフを発話するために、声をそろえて発話したり互いに聞き合ったりする等、様々なやり方を試し工夫して取り組む場を設定した。児童がそれぞれの課題に対して個別最適な方法で取り組み、グループで話し合いながら適した表現を選択していくことで、協働的な学びの場にもなり、学びの質をさらに高めることができると考えた。

視点2 表現を繰り返し使うための工夫

本教材では、児童が物語の展開を容易に想像しやすくするために、物語の展開を短い英文と絵で明確に示した。渟江小学校のマスコットキャラクターの「ふっち」を登場させ、児童が楽しく主体的に活動し、絵本の世界に入り込めるように工夫した。また、繰り返しの表現が何度も出てくるように教材を作成し、読み聞かせをしながら自然と様々な表現や語彙に何度も触れさせ、繰り返し表現を発話させながら読み聞かせを行うことで、児童が十分に慣れ親しみ、思いを表現できるように工夫した。

視点3 評価の工夫

グループで発話しながら表現する場面で、児童が自己評価をもとに課題に気付くことができるようにタブレットの動画機能を活用した。児童が動画で録音した音声を聞き、自己評価をすることで、言えていない表現に気付いて修正することができた。さらに、振り返りカードに学習したことやできるようになったことについて、4つの評価項目と文章でまとめることで、児童が自己の学習を具体的に振り返ることができた。

〈授業者自評〉

今回は、絵本の内容に気持ちを入れるということで、子供たちは楽しんで学習に取り組んでくれた。

児童が工夫をしながら表現させたいと思っていたが、表現で使う言葉（語彙）や、そもそもどう工夫したらいいのかで悩んでいたのも、もっと具体的に示せばよかった。また、めあても最終ゴールにつながるように、こちらから提示するだけでなく、児童と一緒に考え作っていったらよかった。

〈研究協議会〉

めあてについて

- ◎「今日はどんな活動する?」という質問に対して、「前回の続きで、グループで絵本のお話を完成させる」という回答が児童からスムーズにでてきた。児童自身が、本時で行う内容を理解しているため、本時の活動にスムーズに入れていたのがよかった。
- めあての内容が少し大きすぎたのではないか。
→たしかに少し大きすぎたかなというのは感じている。もっと焦点化をして、本時で行う活動内容を明確に組み込めたらよかった。
- 「お話を完成させよう」ではなく、「気持ちに合った言葉を考えよう」というめあてにすると、もっとよかったのではないか。
→「完成させよう」としたことで、完成したかしていないかの振り返りになってしまった。「気持ちに合った言葉を考えよう」にすることで、さらに活動が明確になり、学習の振り返りも意味のあるものになっていたと思う。
- お話の最後を穴埋めにして完成させるのではなく、出てくる具材を穴埋めにするすることで、子供たちの思いやくふうがもっと出てきたのではないか。
→たしかに具材を穴埋めにするすることで、その前後の文脈は定型なので、本時の活動の肝である繰り返しの表現を押しさえながら、子供たちの工夫を引き出したのではないかと思う。

個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実について

- ◎グループワークに慣れている様子や、児童同士で助け合っている姿がよかった。
- 近くの人とグループを作らず、事前にグループを決めていたのはなぜでしょうか。
→子供同士の相性や性格をみて、スムーズには話し合いが深まるグループ編成を優先した。

表現を繰り返し使うための工夫について

- ◎絵本の内容や、印刷物の用意など、教材の工夫が素晴らしかったことで、子供たちが絵本の中に入りこめてよかった。
- 単語ごとではなくて、短い文での「音」を聞かせられる機会がどれくらいあったのか。
→毎時間読み聞かせを行う中で、徐々にゆっくり聞かせていたり、途中で児童それぞれの言葉を入れて言わせたりと、表現に慣れ親しむ工夫をした。

〈指導・講評：京都光華女子大学教授 田縁 真弓 先生〉

英語で表現させるために

- ・日本語でたくさん思いを言える子も、英語では全然言えない。そのギャップを高学年ではジェスチャーなどで埋めようとする。2年生では、ドラマダイゼーションという手法があり、物語をドラマ化するのも一つの手。
- ・授業の最初に、英語に取り組む子供の状況を整えてあげる。そして、英語をなにか子供たちの親しいものに関連付けてあげると、子供たちは英語の世界に入りやすい。

文法的な正しさの重要性

- ・「It's yummy.」ではなくて「I'm yummy.」になっていたり、「I'm happy.」ではなくて、「It's happy.」になったりしていた。どの形容詞に「I'm」や「It's」がつくのかは、高学年になった段階では間違えないでほしい。十分にインプットがあればできるはず。2年生ではインプットはまだ不十分なので、子供が「It's happy.」と間違えていたら、教師は「Oh! I'm happy too.」と同じことを繰り返すように言いながら、実はちゃんと直しているっていうのが、英語的には必要。

めあて・振り返りについて

- ・本時の学習のように、「みんなを笑顔にするために・・・」がめあてだと、子供たちが学習を振り返ることが非常に難しい。めあてに対して自分がどれくらい到達できたのかをわかるようなめあての工夫が必要。
- ・4段階評価がしっかりできていた。「まだ難しい」「友達と一緒になら言える」「1人でも言える」「自分で工夫して言える」の4項目に対して、子供たちはしっかりと自己評価ができていた。これを積み重ねていくことで、6年生の「書くこと」に繋がっていく。

ICT機器の活用

- ・デジタルだと文字を大きく映すことができるため、特に高学年は文字に注目させることができる。
 - ・紙だとボロボロになってしまうが、デジタルだと繰り返しずっと使える。
 - ・ディスプレイやプロジェクターで大きく映すことができる。
 - ・デジタル絵本は、インタラクティブな機能で子供の注意を引きやすい。先生が手で持たなくてよいため、文字を示したり絵を示したりしながら読み聞かせすることができる。
 - ・語彙習得や音韻認識に対して、プラスの効果があるという研究結果が出ている。
- ☆ICT活用は、聞く活動や話す活動の内容理解を深めることができるということが研究で上がってきている。
☆本は、フィクションの中で場面を与えることができる。場面や状況を与えてお話が作れるというのは大きな力であり、児童同士の助け合い、励まし合い、教え合いという英語学習の動機付けをすることができる。